

せなかむじ

年表で読む 古平の歴史

《46》

カスベ漁

漁夫頼入約定書

一、拙者都合上明治四十参

カスベ漁はタラ漁と共に行われきました。今から一五〇年前の天保九年、当時、古平で

カスベを上納したことが記録にあり、その後も続いていたことから、そのころすでに干カスベが製造されていたようです。

明治になってからはカスベの漁獲も増えたようで、明治十三年ごろの税額は漁獲高の一割、

また鑑札一枚についてカスベ六〇尾と定められていて、その年の着業船は四十隻でした。

明治四十三年、港町・柏木大次郎がカスベ漁の船に乗り組んだときの約定書があります。

幹糸	長さ九〇尋
枝糸	長さ五尺、総数六〇本
釣針	一匁五分の鉄線
手石	一個四〇〇匁の石
餌料	鰯
延繩数	三〇鉢～六〇鉢

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第139号・平成13年4月1日

漁期 一月上旬～三月末
漁獲高 七人乗り川崎船八隻
生売り 一六〇～〇〇〇貫

干カスベ 九・六〇〇円
五〇〇貫
一二六円

カスベ漁が終わると、ほとんどが鮫刺網の準備に入り、いよいよ本番の鮫漁を迎えることになります。

カスベ余談

一般にカスベと言われているのはエイの仲間のうち食用になる種類で、佐渡や秋田ではカス

ペ、青森ではカシペ、その外にもいろいろありますが、古平ではカスッペのようです。しかし、東京都から福島、北陸地方でもエイのことをカスッペと言はうそうです。漢字で書くと七種類ほどもあり、ワープロの八千字ではとても間に合いません。

エイの仲間は世界中に約四〇〇種、日本近海ではそのうちの約六〇種がいて、北海道や東北の日本海側にいるガンギエイ・

アカエイなどが食用にされています。昔の本を見ると「とてもまずい」とありますですが、体の中

でアンモニアを発生しやすいので敬遠され、大阪方面ではションベンエイと呼んでいたそうです。アカエイの尾のとげには毒矢があつて、アイヌはそれで毒矢を作っていたといいます。

エイは熱帯から温帯の海に多く住んでいて、寒さは嫌いなようです。エイの中には体の大きさが畳八畳、重さが一トンもあるような怪物みたいなものもいます。海に潜っていた人が突然、暗くなつたので驚いたという話もあります。

カスベという当て字の一つに糟倍というのがあります。これは、カスベは煮ても焼いても食えない、糟(ぬけ)にしかならないという説と、アイヌ語のカシユペから転じたという説がありますがはつきりしません。

古平では特に美味しいものとはされてなかつたようですが、煮物にした後の煮こごりや、干してさつと焼いて食べると酒肴には絶品とされています。欧米人はほとんど食べないようで、それもそのはずデビル(魔)と呼ばれているのです。

大正八年

4/1

裏のナシやスモモ

の木に雪が綿のように着いてい
る、漁場ではすっかり鯨漁の準備
が出来てゐるというのにこの天候
とは、実に意外である、この日、△、○、□では(※1)
一二二杯ずつとれたとのこと、
刺網もほんの少しばかり、古平
でも初鯨を食べた人はまだ三割
ぐらいのものだろう、綿糸相場
は十日程前には四五五円だった
ものが、三九〇円に下がった。

4/2 △～□、種金で十

一、二杯ずつとったという、明日
は旧節句といふので二階にひ
な飾りをする、友達が大勢集ま
つてゐる、鯨漁は累計で二千石
ぐらいか。
4/3 鯨漁は①種金、
困で五六六杯、刺網も相当とつ
たとのこと、タラ大漁、カスベ、
サメも相当量の水揚げがあつた
ようだ。

4/4 鯨漁中漁、(※2)

歌棄山中では十二～二十杯とれ
モッコしょいが忙しい、刺網は
浜一帯で大漁、学校は今日から

七日間の鯨休みになつたといつ
て、幸治が十時半ころ帰つて來
た。

4/5 鯨が前浜一帯でと

れた、②、△、□、(※3)泥の木歩
方、本陣歩方などが五、六杯、
刺網は一般に建網より良い、こ
れから後十日間ぐらいが最も樂
しみだ、沖も陸もなかなか賑や
かだ。

4/6 快晴、浜に出て見

高野名幸作さんの日記から



【40】

ると□が(※4)一枠で一番、
前浜では②が七～八杯、浜中
から沢江にかけて大漁、これで

もう例年の八割ぐらいはとつた
ろう、まだ時期が早いから、この分なら今年は大々漁になるだ
ひどいようだ。

4/9 時化で投網できなかつたところがあつたが、前浜で五～六杯とれた、湾内に枠が

まだ余りもあるが、時化で陸揚げできないでいる。

4/10 昨日の時化で、丸

れに積んで来る、切れ目なく舟が來るので、老若男女が鯨はずしに戦場のような忙しさだ、天気が良く、こんな楽な沖揚げも

珍しい、刺網はこれで三日も続けて大々漁だ、刺網の売れ行きも良いかも知れない、

4/8 沢江、歌葉方面が

良く、崎長、③が十五～六杯、

半、△も七～八杯、刺網は今日

も大々漁だ、ずうと好天が続

いていたが、昼前から(※5)

ダシ風が強くなり、後、シケ模

(四隻)も引いて湾内に入つて

様になつた、古英丸は枠を四つ

（四隻）も引いて湾内に入つて

島神社下の浜に、百五十石ぐら

いの帆船が打ち揚げられた、ま

た午前十時ごろ、沖の白い大帆

船のいかり綱が切れ、陸岸に吹き寄せられて來たので、町中の

人は大騒ぎ、その帆船は△支店の浜に寄せられ、大波にもまれ

て帆柱は折れ、甲板も壊されて

いたが、乗組員はロープによつて全員救助された、消防団員や

役場吏員らが救助に当たつた、

沖にはまだ帆船が二隻、三百ト

ンぐらいの汽船が一隻いたが無事であつた、近ごろにない大時

化であつた。

栓引きをしている、昼から火防組合で定期巡回をするが、どこ

の家でも(※7)鯨つぶしで大忙

しだる。

4/12 夜中から暴風雪で

大時化となり、家の中にいても恐ろしい位だ、本陣の浜ではど

こも道路まで舟を引き揚げてい

る、以前、出羽丸が遭難した厳

島神社下の浜に、百五十石ぐら

いの帆船が打ち揚げられた、ま

た午前十時ごろ、沖の白い大帆

船のいかり綱が切れ、陸岸に吹

き寄せられて來たので、町中の

人は大騒ぎ、その帆船は△支店

の浜に寄せられ、大波にもまれ

て帆柱は折れ、甲板も壊されて

いたが、乗組員はロープによつて

全員救助された、消防団員や

役場吏員らが救助に当たつた、

沖にはまだ帆船が二隻、三百ト

ンぐらいの汽船が一隻いたが無

事であつた、近ごろにない大時

化であつた。

× × ×

日記の中で、再三出てくる言葉の意味を聞かることがあり
ますので、その中のいくつかについて説明しておきます。

【※1】一杯（いっぱい）

枠網（または単に枠）といわれる、袋状の網を船底に吊り上げた枠船から鯵を積み替え（これを汲むという）、陸まで往復して鯵を運ぶ船を汲み船と言っています。この船は一〇～二〇石（七・五～一五トン）を積むことができるので、汲み船の運んだ回数により、建網の漁獲量を表すのです。汲み船が漁（ます）の代わりというわけですが、新聞などに発表される、小樽の大手の海産商など数社が調査した結果を見ても、ほとんど数値には差がありません。

【※2】歌棄山中（うたすつやまなか）

まさか、山の中で鯵が獲れるはずがありませんが、崖が続いている、人家などが無いようなところの海岸を一般に山中と言っています。歌棄から立岩辺りまでの海岸を通称『歌棄山中』と言っていたようです。

【※3】泥の木歩方（どろのきぶかた）

古平ではなまつて「ぶがだ」と言います。歩方

というのは、明治二十年代ころからの鯵場の経営方法で、歩合制による共同経営の一つです。

総水揚げから親方と使用人で、或いは仲間内でどう分けるかなど方法はいろいろです。

泥の木歩方というのは、当時は農家の人たちの中にも、鯵の刺網をやっている人もいましたから、泥

歩方とも同じです。本陣歩方も同じです。

【※4】一枠（ひとわく）

【※1】で説明した枠網の中には、二五〇石～三〇石（一八七～二三五トン）入りますが、

これで漁獲量をある程度推定できます。しかし、枠網がいつも

いっぱいになるとは限りませんが、一枠獲ったということは相

当の漁があつたということになります。一般的には建網一か統（一カ所）で三〇〇石の漁獲があると、その年の収支が償うとされています。

【※5】ダシ風（出風・ダシシカゼ）

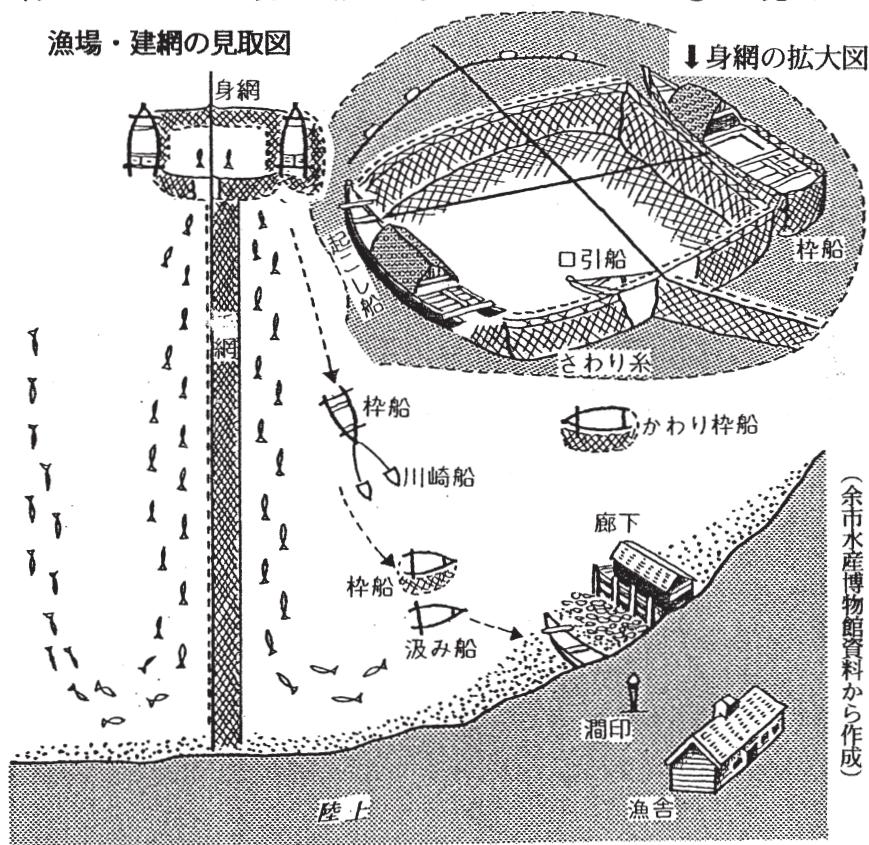
船出するのに都合の良い便利な風という意味で、陸地から海

に向かって吹く強い風のことを言います。当然、その地方によって風向きは違うことになりますが、寿都のダシ風は、歌に歌われるほど有名です。

「ダシはダシでも店（みせ）や

の書出しなおつかねエ」
ダシ風もこわいが、漁の無いときの商店からの書出し（請求書）は、支払いも大変でなおこわい（方言でおつかねエ）というわけです。

漁場・建網の見取図

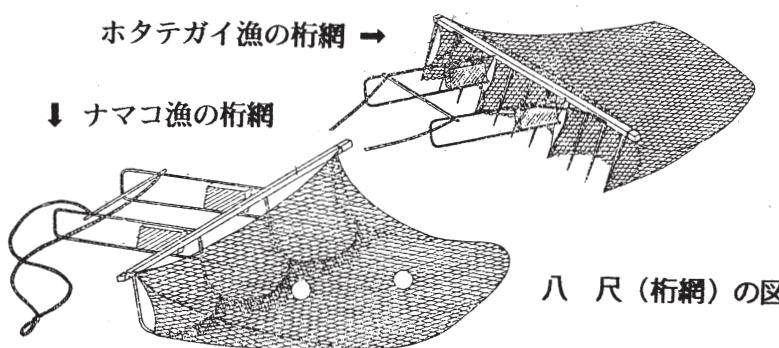


【※6】八尺引き (はっしゃくひき)

「明治二〇年代のホタテガイ漁業の中心地は小樽であったが、資源を取り尽くした漁業者がオホーツク海へ操業にでかけ、桁網漁法を伝えたことによって、オホーツク海や根室海域におけるホタテガイ漁法が発展した」とあります。(中央水試研究員著『北のさかなたち』より)

ちょっと意外な話ですが、この桁網(けたあみ)のある地方での呼び名が八尺なのです。因にあるように大きな口を開いていますが、この口が広いことから八尺(2.4メートル)という名がついたのでしょうか。八尺はホタテガイの外、ホッキガイ・ナマコなどの漁にも使われる漁具です。

「枠を沈めた……」とあります
が、これは枠船に吊り下げられている網袋の底が、海底の石に
されて破れたのか、何かの理由
で網が破れて、中の鮓が出てし
ましたことを言います。それで
八尺を引いて、海底の鮓を回収
しようというわけです。



【※7】鯨つぶし
(くひしき)

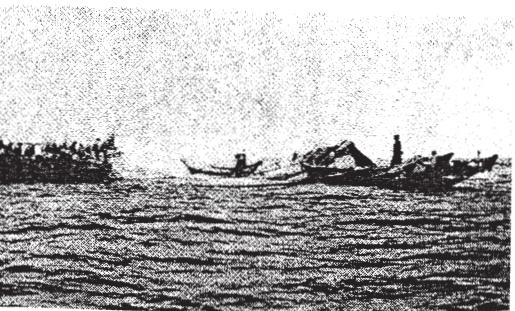
鯨つぶしとはちょっと荒っぽい言葉ですが、身欠きを製造する作業の一つで、鯨のえら・数の子・白子・その他の内蔵を取り除き、腹を割くことを言いますが、主に女性の仕事でした。

むかし、鯨つぶしを知らないお嫁さんが来て、ほんとに鯨をつぶしてしまった……どんなふうにつぶしたのかは分かりませんが、こんな笑い話も伝わっています。

しかし、どうしてこの作業のことを鯨つぶしというのか、その語源は分かりません。



←鯨を積んで陸に向かう汲み船
左が起こし船、右が枠船
網起こし↓



古平いろはうた

平成に今よみがえる寶海寺

本陣の沢の開けたところに、近ごろは余り聞かれなくなりました。が町内の人たちは、なぜか「門徒」とか「門徒寺」と呼ばれている深遠山寶海寺が、古い歴史を思わせるように静かなたたずまいを見せていました。

真宗深遠山寶海寺の創立は明治三年(一八七〇)で、新地町丸山下にあつた琴平神社の近くに、東本願寺管刹所として仮本堂と庫裏が建てられました。その後、寺号が下付されて寶海寺となり、東本願寺の一般末寺としてここに創建されました。

当初、寶海寺には住職がありませんでしたが、明治十八年、松前郡西教寺の住職であつた西館純一が、それまでの留守居に替わつて第一世住職となり、現在に及んでいます。

明治二十一年、本山から深遠山という山号が下付になつたこ

とを記念して、幾井舊七が発起人となつて梵鐘を寄進しましたが、この梵鐘は第二次世界大戦中に金属類の供出命令で取り外され、鐘楼は町道拡張のため解体されてしまつたことは誠に惜しいことです。

翌二十二年、港町で海産商を営んでいた仲谷半次郎が現在地を寄進し、同二十四年に本堂と庫裏が落成し、遷座式が行われました。

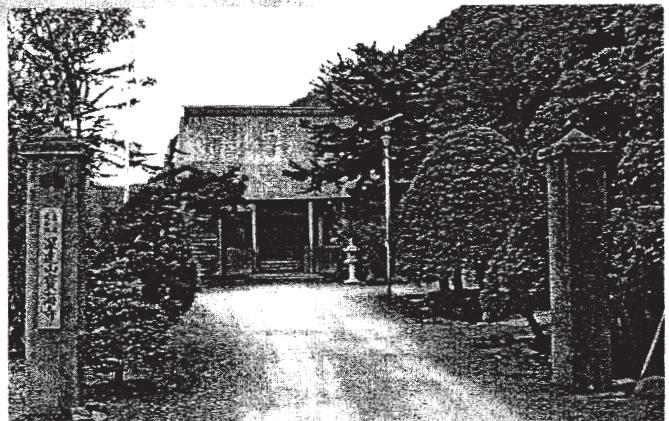
この本堂の新築に当たつたのは、当時、寺院などの造営に優れた設計・施行をし、後に藍綬褒章を受章した九代目伊藤平左衛門で、東本願寺大師堂や、その他全国各地の有名な寺院の建築を手がけています。

都でも仏師として名を知られた佐藤伝作の作で、外にも禅源寺・願雄寺にも、仏像や欄間

の彫刻を残しています。

また、佐藤伝作は古平消防組の創設にも私財を投じてまで貢献し、禪源寺境内にはその記念碑が建てられています。

寶海寺本堂が創建されてからすでに百年余りが過ぎた平成五年、住職の熱誠と、祖先崇拜の



檀家の熱意によつて本堂改築の起工式が行われ、翌六年一〇月九日、関係者の宿願であつた本堂が完成し、古式床しく落慶法要が執り行われました。

丘陵を背景にして建つ、古代からの寺院建築技術により、莊重な中にも均整のとれた優美な建築美は、宗徒の喜びだけに止まらないで古平の偉觀でもあります。

灯台を目指せば家族の待つ港

鉄道建設への町民の熱烈な要望から、大正十年、積丹半島の開発と、地域の文化や住民生活の向上を図ることを目的として、積丹半島鉄道期成同盟会が設立されました。しかし、その運動は一喜一憂する中で難航し、それならばということで、鮫の減少傾向から今後は沖合い漁業への転換や、陸上の交通と並んで海上の交通・運輸を盛んにしたいという願いから、船入澗の築設も合わせて実現しようという町民からの声が高まつてきました。

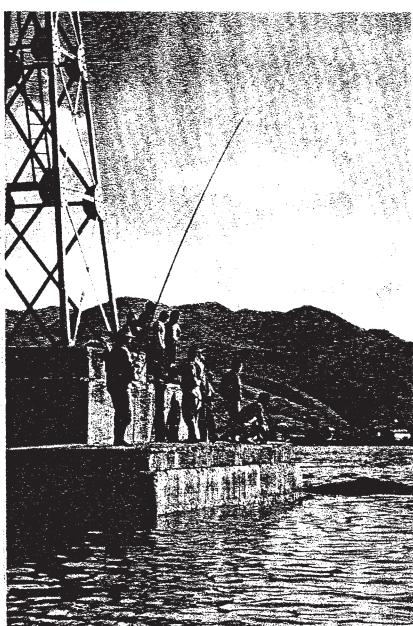
昭和三年、鮫凶漁による緊縮財政の中で、沿岸漁業の振興を図ることが急務であるとして船入澗築設の計画を進め、道に補助金の申請をしたところ明四年度から九年度までに、補助金二万円余りを交付するという知らせが入りました。また、財源の起債については折からの政変で困難な状況でしたが、漁業に

活路を求めようとする熱心な陳情が実を結んで、起債の許可が下り、それを待つて同五年二月起工式が行われました。

ところが工事が始まって間もなく、突然、設計変更が町会（町議会）で論議され、それが工事の遅れにもつながり、その間のいざこざから主任技師が辞職するという事態にまで発展しました。この設計変更には鮫漁業者の外、一部の町会議員や有力者の思惑からの運動があつたと言われ、これが後にまた、町会での紛糾を招くことになりました。

船入澗築設工事は昭和四年に着工し、同六年に完成の予定でしたが設計変更や起債の遅れ、それに猛烈な暴風雨による被害などから、完成したのは同八年八月三一日でした。

竣工式は快晴に恵まれた十月
防波堤 一五〇・一三メートル
防砂堤 五〇・一四メートル
金額 三〇七、〇〇〇円



↑ 灯台付近は子どもたちの遊び場

船入澗落成式 →

五日、約五〇〇人が参列して盛大に行われ、式が終了後、学童も参加して祝賀の旗行列が繰り広げられ、学童には紅白のまんじゅうが記念に贈られました。この船入澗の完成により、昭和六年と同九年を比較してみると、発動機船の数で二三隻から三五隻に五割も増加し、タラは八四〇トンから一、〇三〇トンと二割、スケソは一、九二五トンから四、八五〇トンと一気に二倍半も漁獲高が増加しています。また、出漁中の遭難や停泊中の漁船の破損事故なども減少し、沿岸から沖合い漁業への発展が図られ、その後の古平町の興隆の基盤となつたのです。



断章小説【ふるさと遙か】 第21編

愚行の証言

吉川 義雄

いつから此処にあつたのか。
灌木の茂みがむせかえるような
下草とからみ合っている中に、
大型のグライダー数機がやつれ
た姿で放置されていた。

開戦直後、スマトラの油田地
帶パレンバンとセラベス島の要
港メナドに、降下部隊が奇襲し
て成功したことはあつた。

落傘部隊が降下して周辺を
制圧し、続いて大型機に曳航さ
れたグライダー部隊が続くとい
う攻略戦法である。

神野軍曹は、舌打ちしながら
グライダーの翼端をたたいた。

風雨にさらされた布張りの翼
は、あきれる程のもろさで破れ
た。緒戦の成功後、降下部隊の
ことは一切発表しなくなつた。

相手の居ない戦いは無い、図
に乗つたとき必ず敗れる。

風に漂う降下部隊が、満を持

して待ち構える地上からの嵐の
ような砲火の中で、どうなるか
は分かり切つた帰結しかない。

同時発進のグライダー部隊も、
同じような運命をたどる。一機

に数十人乗り組んでいるエンジ
ン無しの布張りの機体が、腰繩
を打たれた囚人みたいに三機四
機と数珠つなぎにされ、敵地の
上空から地獄の底に突き放され
るのだ。

降下部隊のカッコウのよさ
に、青少年が、群がるように志
願したこと。神野は腹を立て
た。

B24の爆弾が雨のように降つ
た後の基地は、数日の間は機能
を完全に失つた。

直撃をまぬかれた数棟の格納
庫は、裏側に至近の爆弾を食ら
い、爆風のすさまじさに全棟の
背後の鉄筋が曲がり、天空に向

かって、大口を開けたような異
様な姿をさらした。
神野兵曹がその前を通つたと
き、一棟の前に幕が張られ、番
兵までつくものものしさに驚か
された。

「オイ、何事だ」
と尋ねても首を振るだけで、緊
張の面持ちで迷惑がつた。

生涯の中で、知らずにいた方
がいい場合もある。翌日、彼は
甲板下士官を殊更ひけらかすよ
うに、首から朱色の絹ひもを垂
らして、再びそこに行つた。

「おいッ点検するぞッ」
番兵は「ハツ」と敬礼して彼を
通した。

神野はそこに異様な飛行物体
を見た。全長四・五メートルはある
うか、翼幅も同じくくらい、後尾
には切りそいだようない穴があ
り、その中に三本程の酸素ボン
ベのようなものが見える。本来
エンジンのあるべき前方は、異

様に突き出でていてプロペラなど
は無い。操縦席は一人が座るの
がやつとのスペース。操縦かん
だけは突つ立つていてるが、計器

類は一切無い。そこにあつたの
は、上から下に一筋のひもが張
られ、それに荷札のようなもの
が付いていた。「引け。撃発と
なる。」要するに安全装置が解
除され、先端のどこにぶつかっ
ても爆発するのである。この飛
行機もどきは人間爆弾であつた
のだ。

『神雷』とひそかに命名された
この人間爆弾は、大型機の下に
装着され、目標近くで人間が乗
り込み、切り離された直後に數
秒しか噴出しないロケットの推
力を頼つて飛行する、一トン近い
人間爆弾となつて、目標に向か
つて行くのだ。

悠遠の宇宙生命とともに人の命
は退出を繰り返し、今世で刻
むこの人生は永劫に自分自身の
業として残るとか。ならば、今
のいのちこそ大切である。愚行
に加担するひまなぞ無いのだ。
番兵の敬礼に応えもせず、神
野は「くそッ」と叫んでそこを
去つた。

音を立てて、祖国は崩れ始め
ていた。
(この稿終わり)

生活の中に生きてる



室 谷 忠 雄

【玄関】 ||げんかん

どこの家でも普通にある玄関ですが、これは奥深い禪の道への入門のことと、これが転じて寺の書院や公家、後に武家の入口で式台のあるところを玄関と言ふようになりました。庶民の家の正面の入口を玄関というようになつたのは江戸時代で、そのころは「げんか」といわれることが多かつたようです。

【安心】 ||あんしん

不安や心配事がなく、安らかな心でいられることを言います。が、仏教用語としては「あんじん」で、浄土宗では阿弥陀仏の誓いを信じて一片の疑いもなくなつたことをいいます。

それで、ある信念を持つて心が動かないこと、先の見通しが立つてなんの不安もないことをいうようになりました。

【火の車】 ||ひのくるま

地獄で燃えさかる炎に包まれ

た車のことをいいます。仏教用語の火車（かしゃ）という言葉を訓読みしたものです。

生前に惡行を行つた者はこの火車に乗せられ、獄卒に引かれて地獄におくられるという。

【利益】 ||りえき

商売でのもうけはりえきですが、仏教用語としてはりやすくです。お参りに行くと、普通は丁寧にごりやくと言つています。神仏の力によって授かる富や幸福のことをいいます。

【無心】 ||むしん

妄念から離れた清らかな心のことですが、一方では何の考えも無い、思慮分別が無いという意味になります。遠慮なく物をねだる「金品を無心する」などは困ったものです。

川柳

石井愛子

日の本の首のすげ替え神憂う
何時見ても結婚パーティー微笑まし
光りさす春が日射しに顔を出す

訂正・【高野名幸作さんの日記】は大正八年です。

そちこちの配管工事日脚伸ぶ 斎藤波留

病癒し妹ワープロの初便り 山口悦子

晩年の手入届きしアマリリス 越野敏雄

旅立の春衣さらりと装ひけり 大和田絵伊

北斗星変らぬ岬みさき 去年今年 福井幸平

月のぼりオレンジ色の春霞はるかすみ 関口勝志

冬籠りひとり気まゝの厨ごと よしざきり

石蕗わさびの日に日に色の濃く伸びて 仲谷比呂古

満ち潮に色新たなり珊瑚草 越野清治

雛の日や父の回忌の巡り来し 室谷弘子